

熱帯林業半生記

小林紀之

はじめに

熱帯のさわやかな夜明、朝霧の中にヤカールの樹冠が浮かんでいました。ブツアンから最初の赴任地リアンガに向かって走っていました。昭和39年9月末、熱帯林と私のはじめての出会いです。

長年にわたり南洋材取引の仕事が続け、フィリピン、インドネシア、マレーシアには10年近く駐在し、時代の変遷を様々な局面から体験しました。森林開発から現地加工へと流れは移り、さらに近年は環境保全が企業にとって重要な課題となってきました。

私のささやかな経験を記し、皆様の熱帯林業を考える参考にしていただければ幸いです。

フィリピンかけ出し時代

私の最初の任地は、南スリガオ州、リアンガにある LIATIMCO の森林開発現場 (Logging Camp) でした。月間 1,000~1,500 m³ を生産する中小業者で、当社が技術支援していました。私の駐在目的は生産効率をあげスムーズに船積みすることでした。

入社から着任するまで6か月間、ブルドーザーの運転・修理、丸太の筏組、寸検等ひととおりの訓練を受け、かけ出しロッガーとして勇躍現場入りしました。

当時のリアンガは陸の孤島で、ブツアンから陸路で1日行程、しかも大雨の度に道路が寸断され、度々食料、パーツ等の供給がとぎれました。中小業者の常として機材はほとんど第二次大戦の米軍払下げ改造型。戦車の砲塔をはずした集材用トラクター、ボート用のグレイマリンエンジンを積んだ運材トラック等、傑作・迷作もありました。機材はよく故障しましたが、足りないパーツをやりくりし実に器用に修理し、使いこなしていました。道路建設、集材等ロギングも上手で、かけ出しロッガーの私などとてもおよぶところではなく、実戦技術を学ぶ絶好の機会となりました。

技術指導では、たいしたことも出来ませんでした。夕方になるとみんなでチューバ(ヤシ酒)を飲んだり、子供達を集めて寺小屋のまね事をしたり、現地の生活にす



写真-1 フィリピン林業—LIATIMCO の修理工場 (S. 39 リアング)

っかりとけこみ、かわいがられ、貴重な体験でした。この事業地には約半年いましたが、日本人と接する機会はなく、3か月間も日本語を話すことのない、今では考えられないめずらしい体験もしました。

その後、同じミンダナオ島のサンボアング、クタバトと転動し現場業務に携り、マニラ勤務をへて、昭和42年末に帰国しました。

ここで当時のフィリピンの林業について少しふれて見ましょう。昭和40年代に入ると、ブツアンを積地とするアグサン河流域やダバオ周辺はピークを迎え、新しい産地としてクタバト、ブキドノン、サンボアング諸州が注目されだしました。月産10,000 m³以上の大手も数社ありましたが、1,000~1,500 m³の林業会社が乱立していました。

出材の機械化は進んでおり、チェーンソーが普及しはじめ、集材はヤーダー方式が主流でした。スパーツリーを設置し、トリプルドラム集材機を使用する本格的なものが多くありました。マレーシア、インドネシアではトラクター集材を主としているのと異なります。これはフィリピンの方が単位面積当たりの蓄積の多いこと及び米国の影響によるものと思われます。

フィリピンにはPICOP, LBLC, ALASASAN, NASIPIT等の名門林業会社があり、古くから加工も植林も手がけていたのに、発展しなかったのが残念です。とくにブツアンの衰退を見るにつけ、最近よくいわれる持続的開発の重要性を痛感します。やはり森林あつての林業です。

このような中で、社会林業としても注目されているPICOP社のアルビジア・ファルカタリア造林や、わが国の援助によるパンタバンガン造林プロジェクトの成果は熱帯林業の未来に希望を与える灯火といえましょう。

インドネシア時代—激動の数年

<クダクダ出し>

クダとはインドネシア語で馬のことです。日本では木馬という言葉がありますが、インドネシアでは人力による丸太搬出をクダクダといいます。昭和40年代前半の原木輸出は一部の例外を除きクダクダ材で、サマリダを中心に積出されました。

作業はすべて人力。オノを使って伐倒し4mに玉切りします。材端にエロンエロンとよばれる穴をあけ、籐で作ったロープを通し、10人がかりで木馬道を引っぱり出します。集材範囲は川岸から数百メートル範囲で、乾季に水際まで出し、増水時に一気に流送します。まさに、お天気次第で、品質、出材量ともきわめて不安定で、洪

水でどっと出ると大暴落、出ないと暴騰のくりかえしでした。

昭和 46 年 6 月、サマリダの 10 万 m^3 以上の大量在庫と大暴落を期に、インドネシア政府はクダクダ材の伐出禁止に踏切り、翌年から輸出禁止となりました。

私もサンクリランの奥地でクダクダ材の集材業務に携わりました。各流域を丸太舟でまわり集材可能量を調べ、配船計画をたてるのが仕事です。奥地に入ると全く通信手段はなく、サマリダ事務所よりの指示はラジオグラムで受けました。ラジオグラムとは、放送局が放送時間終了後にアルバイトで伝達文を放送してくれる方式です。夜中、山中のキャンプで小型ラジオを耳にあて聞くのですが、インドネシア語でしかも商売上の秘密は暗号なので聞き取りに非常に苦労しました。“炎熱商人”ならぬ冒険商人の生活でした。

<グリーン・オリンピック>

昭和 45 年から 1 年半バリックパバンに勤務しました。

インドネシア政府は木材輸出を重要な外貨獲得産業として着目し、従来の公社中心から民間開発方式へ転換しました。林区権を次々と発給し、外貨も積極的に導入しました。折からの世界的な森林資源ブームと重なり、各国企業は合弁会社を設立し、森林開発に着手しました。輸出量も飛躍的に伸びました。日本、米国、英国、フィリピン、マレーシア、韓国と各国が進出しグリーン・オリンピックと呼ばれるほどでした。

私がバリックパバンに勤務した 40 年代の中ばは開発ブームがはじまり、クダクダ時代から機械出しに移りつつありました。サマリダが中心で、バリックパバンは空港がありさしずめ玄関口といえました。

バリックパバンの下町、アグス・サリム通り、サムスティンさんの家を借り、事務所、住居、宿舎と多目的メスにしました。ここを選んだのは、敷地内に年中涸れる事のない清水の出る井戸があったからです。熱帯での水の大切さを知る先輩の選択によるものです。

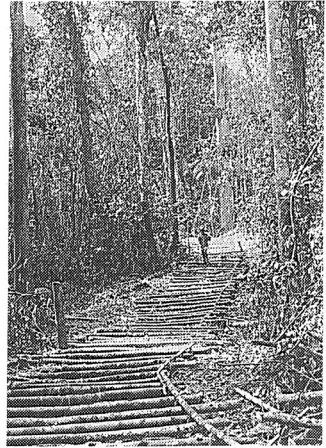


写真-2 クダクダ出し一木馬道 (サンクリランにて)

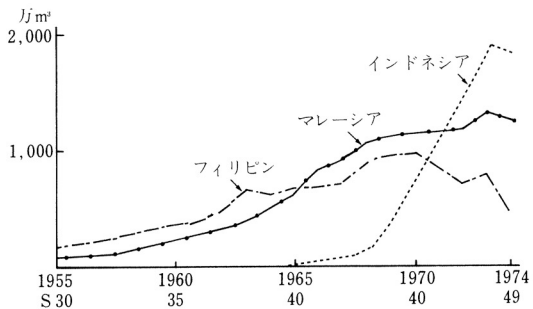


図-1 昭和 30 年、40 年代主要産地国輸出货量推移 「転換期の南洋材問題」(日本林業調査会)より抜粋

乾季の水不足の時、水のありがたさを知り、先輩の知恵に頭がさがりました。家主のサムスティンさん一家には食事、洗濯等お世話になり、子供さんとも仲良くなり下宿人の如き生活でよい思い出になりました。後日談ですが、サムスティンさんはバリックパパンで給水をする船にあの井戸水を売る商売をはじめ、“水商売”で大金持になったそうです。

<KTI>

私のバリックパパンでの任務は、以下に述べる ITCI の船積業務、KTI の後方支援業務、通信業務が主でした。サマリンドに向う人達に車の手配をするのも大切な仕事でした。P.T. Kutai Timber Indonesia (KTI) は、当社と現地側パートナーが昭和 45 年に設立した合弁会社で、マハカム河中心のスブルに 50,000 ha の林区を取得していました。

当時、バリックパパンからサマリンドは 1 日近くかかりました。現在の立派な道はなく、旧道の悪路をハンドルドアまで四輪駆動車で走り、さらにマハカム河をボートで漕ぎ抜きました。スブルまではさらに半日以上の行程でした。

KTI の操業初期、日本人技術者の一人が盲腸にかかり、手遅れで悪路の搬送は危険な状態になりました。当時サマリンドへの航空便はなく、ヘリコプターもありませんでした。運よく ITCI のヘリコプターが米国から到着し組立中でした。ITCI は救援の要請を快よく受け、全力をあげ組立てを急ぎ、一部未完のまま、夕方サマリンドに向け飛立ちました。私は道案内と通訳を兼ね同行を求められました。米国人パイロットが着任早々で現地不案内のため山沿いの直線コースをさけ、通常の陸路で使うハンドルドア経由の道路と河をたどるコースを飛びました。患者を救出しバリックパパンに戻ったのは日没寸前、危機一発の救援フライトでした。患者は翌日シンガポールで手術を受け一命をとりとめました。当時はマラリア、肝炎にかかる人も多く、奥地でかかると命取りになる危ないものでした。

当社では、ここ 25 年で 150 人以上が熱帯地域に勤務しましたが、幸いに 1 名の犠牲者も出ていません。全社をあげ、予防と緊急時の対処に取組んだことによると思います。私はバリックパパンの経験でこの大切さを教えられました。

<ITCI>

P.T. International Timber Corp. Indonesia はバリックパパンからマハカム河にかけ 60 万 ha の林区を有す同国有数の林業会社です。現地企業と米国企業 Delong 社の合弁で、昭和 45 年着業しました。買手は三井物産、三菱商事、当社で、インドネシアの林業開発の幕明けを代表する大型プロジェクトでした。私の仕事は、生産計画に基づき配船計画を本社に報告する連絡業務、仕分け、積付指示等の船積業務でした。バリックパパンの港で、筏に乗る毎日でした。当時、この仕事を通じ多くの方と知り合いになり、三井物産の土屋氏、佐藤氏、三菱商事の吉田氏等現在も業界で活躍しておられます。

その後、ITCI の Delong の持株は、ウェアハウザー社が買収し、マハカム河上流の GPI (ジョージア・パシフィック社) とならび米国式の大規模森林開発の代表例

になりました。

〈工業化の幕明け〉

昭和 48 年から 2 年間、ジャカルタに勤務しました。公私とも波乱に満ちた 2 年でした。第一次オイルショックによる木材市況の乱高下。田中元首相ジャカルタ訪問時の反日大暴動。ベトナム戦争終結等世界的にも大きな動きがありました。

インドネシアの原木輸出量は昭和 47 年には 1,400 万 m³ に達しトップ輸出国になっていました。

政府では木材工業化推進政策のもと加工義務を課していましたが、当時はまだそれ程強制力のあるものではありませんでした。当社では工業化の重要性に着目し、昭和 48 年 KTI による合板工場建設に着手しました。日系合弁企業として第 1 号の合板工場となりました。昭和 48 年 10 月、東ジャワ、プロボリング市の海岸でサラマタン（地鎮祭）を行い、用地の埋立を開始しました。KTI のルスタム社長、佐藤氏（当社現ジャカルタ支店長）、私の 3 名で出席しましたが、真昼の強烈な日ざしの海岸で回教儀式によりヤギの頭を埋め、アラーの神に無事を祈願しました。現在、この工場は合弁企業の代表例として評価されておりますが、合弁の相手先が良かったこと、派遣された日本人スタッフの方々が技術的にも人間的にも立派で、現地の立場、事情をよく理解し忍耐強く努力されたこと、優秀なインドネシア人スタッフに恵まれたこと等あると思います。

私事で恐縮ですが、ジャカルタでは家族と共に生活をしました。三男はジャカルタ生れの当社第 1 号、Made in Indonesia です。当時は現地出産のケースは少なく、とにかく無事育つようにと健之と命名しました。おかげで KTI 同様によく育ち、高校 1 年で毎日ラグビーに明け暮れています。私の病気や家族のことで多くの方々に非常にお世話になりました。この場をかりお礼の言葉を述べさせていただきます。

現地の人々から教えられること

森林の地上調査のことをわたし達は通称サーベイと呼ん



写真-3 ITCI 米国式作業—ゲースネックローダーとトレーラー (S. 46 バリックパパン)

表-1 主要産地国原木輸出量推移 (単位:千m³)

	1960年 (S. 35)	1970年 (S. 45)	1980年 (S. 55)	1989年 (H. 1)
フィリピン	3,512	9,606	715	0
インドネシア	115	7,834	14,583	0
サバ	1,711	6,150	8,234	6,135
サラワク	349	3,127	6,695	14,960
P. N. G.		193	642	1,258

1960, 1970 年: 『転換期の南洋材問題』, 日本林業調査会

1980, 1989 年: 日本木材備蓄機構の資料による



写真-4 森林調査 — 右端筆者、となりは村上氏
(当社大阪営業部長) (S. 61 ソロモン
群島サンクリストバル島)



写真-5 イバン族の人達 — 犬を連れての山林調
査 (S. 40, サバ州センポールナ)

でいます。サーベイでは短い時は1週間、長いと2~3週間山に入り、同行する現地の人々と同じ所に寝て、同じ物を食べ、色々な話をして親しくなります。彼等から教えられることも多々あります。ここでそのいくつかを御紹介します。

＜イバン族と川の話＞

ある山林調査に入った時、同行したイバン族の人達と親しくなり、川岸のキャンプで流れを見ながらだべっていました。私が東京の人口は1,000万人以上だというと、彼等はびっくり仰天して、東京にはどんな大きな川が流れているのかと質問してきました。イバン族は川の民ともいわれ、川沿いに住んでいます。昔からの生活の知恵でひとつの流れにどれくらいの人が住めるか知っているのです。まさに地球環境保全の原点的発想です。従って1,000万人となるととてもない大河がないと住めない、

そんな河があるのかが彼等の疑問でした。

＜パプア・ニューギニアの人々の生活＞

商談や山林調査で度々パプア・ニューギニア、ソロモン諸島を訪問しました。ニューギニア人といえば、我国では高地人のイメージが定着していますが、わたし達が通常接するのは平地部の諸部族で、高地人にくらべ近代文明に接する機会が比較のあった人々です。それでも山林調査で少し奥地に入ると、およそ物質文明とはかけ離れた生活に驚くことが度々あります。

(土地に対する考え方)

人々は土地に対する所有意識が極めて強く、部落、家族単位のテリトリーは川または尾根筋を境界として伝統的に決まっています。いわゆる Customary Land と呼ばれる所有形態です。わたし達も山林調査の際、この点を充分注意する必要があります。現地の案内人、ポーターは他の部落のテリトリーに入ることを非常にいやがりまずし、各部落の長より事前に入山許可を得ておかないと思わぬトラブルにまきこまれる恐れがあります。

パプア・ニューギニアの林業政策の特長は、TRP 制度（Timber Right Purchase）で、伐採権を発給する前に当該地域全住民の同意サインが必要です。住民の伝統的権利を前提とした民主的な制度ですが、TRP 手続には非常に時間がかかります。

（村落の生活）— Gaden と清潔な環境

主食はタロイモをはじめとするイモ類で、焼畑で栽培しています。

焼畑はピージン（Pisin 語）で Gaden と呼び、周囲を野豚よけの柵でかみ大切にしています。（Gaden は英語の Garden に由来しています。）

森林調査でいくつかの部落に滞在しましたが、清潔な環境に感心しました。1部落は通常数戸からなり 20~30 人が住んでいます。ブタ、イヌ、ニワトリが飼育されていますが、家の中、周辺ともゴミがなく清潔なのに驚かされます。食料のカスは飼料となり、無駄なものもなく、ゴミが出ないのに朝夕必ず家の周囲を掃いています。便所は部落のはずれに掘立小屋があり、おとし式でニオイさえ気にしなければ一応清潔です。生活様式全般が自然の節理に合う地球環境に順応したものといえます。

熱帯林と地球環境問題

私の現在の仕事は、社内の地球環境委員会の事務局長として、企業活動と環境保全の調和のテーマに取り組んでいます。まことにむずかしいテーマですが、企業、特に林業に携わる者としては重要な課題と考えております。

熱帯林の減少では商業伐採がよく問題となっています。皆伐と択伐、開発と林業がごちゃに議論されたり、農耕用に皆伐された場所の写真が商業伐採跡地として紹介されたり、当を得ていない非難も多くあります。誤解や認識不足は残念なことです。私も林業界の一人として、熱帯林を大切な資源として未来の世代へ引き継ぐ努力をしたいと考えております。

木材は再生産型資源、しかもリサイクル可能で、地球環境に最適な素材です。森林は生物資源として永续性があり、21 世紀の資源としてもっと認識されるべきだと思います。

先頃発表された「熱帯林問題に関する懇談会」の中間報告では、熱帯林の資源的特質を「環境保全と経済発展のために多様な機能を発揮する資源、再生可能な資源、地球上で最も多様な生物種を保存する資源」としています。まさに当を得た定義づけだと思います。

林野庁、森林総研、東大、JICA、ITTO 等訪問し、御指導を受ける機会が度々あ

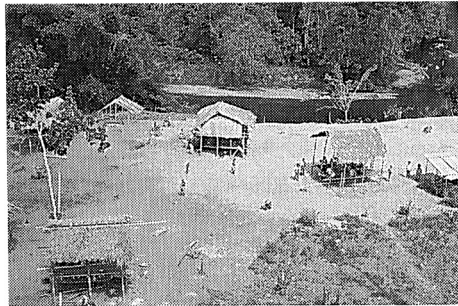


写真-6 パプア・ニューギニアの村落（クブナ付近）（S. 57, クブナ付近）

ります。多くの方々が情熱を持って熱帯林に取り組んでおられるのには頭が下がる思いが致します。最近では特に JICA のペルー造林プロジェクトの報告会でお聞きした現地での御苦労、森林総研の井上真氏のマハカム河上流まで行かれた努力等、若い方々の情熱に感服致します。

わたし達、民間企業としても、熱帯林保続、再生の一助となるお手伝いが少しでも出来ればと私なりに頭を悩まし、検討しております。是非、今後とも皆様方の御指導、御鞭達をお願いしたいと思います。

おわりに

私の 20 数年の熱帯林とのおつき合いの前半分、昭和 40 年代を中心に書かしていただきました。昭和 50 年から 5 年間、住宅部門に携り、その後再び南洋材部門に戻り昭和 58 年から 2 年間サラワクのシブに勤務しました。私にとっての熱帯林業は、企業人の多くが経験した典型的なケースだと思います。私のかかえている悩みも多くの企業人が当面している課題だと思います。これまでの経験を生かし、将来に結びつく熱帯林業に貢献出来る道があれば、これにまさる幸せはありません。最後に私の尊敬する熱帯林業の大先輩である保田当社元会長が昭和 50 年に書かれた文章を引用してむすびの言葉にかえさせていただきます。

ともあれ外国で仕事をする以上は、何よりもその国の利益や政策的立場を優先させる考え方が基本でなければならないし、南方の木材事業にしても、先ず現地に同化しながら気長にじっくりと腰を据えて、それこそあせらず、あてにせず、あきらめずの心構えで経営をうまくリードしてゆくことが大切であることを痛感するものである。その点我々は過去における我々の身勝手な行き方を、政府も民間も共にこの際反省する必要がある。(中略) 国際協力とは、夫々の国が夫々の立場や国内の事情を理解し合った上で、相互補完機能を果せるように、お互の特徴を発揮して分業することであり、一方的な利益に基づく考え方の押し売りでは決して成功しない。(林経協月報、昭和 50 年 12 月掲載「南方林業への回想」より)